

特集

内膜を極めるⅡ

—婦人科疾患の治療と内膜機能—

企画者のことば

堤 治* 久須美真紀*

子宮内膜の主な機能は受精卵の着床の場であり、生殖補助医療(ART)の臨床や研究においてその解明は重要である。受精卵に対する臨床や研究はPGT-Aやゲノム編集などの報告もあり、より顕著で話題性に富んでいる一方、子宮内膜はブラックボックス的な要素もあり、研究が遅れているという印象をもつ方も少なくないと推察される。

ところが近年、分子遺伝学の応用や様々なアプローチにより、内膜の機能と着床をめぐる新しい知見が相次いでいる。また、子宮内膜機能に関係する婦人科疾患の治療法にも革新的進歩がみられている。本特集では「内膜を極める」ため、「内膜の機能と着床をめぐる最近の話題」と「婦人科疾患の治療と内膜機能」の2部構成で、子宮内膜の臨床と研究のアップデートを図った。

第1部では、子宮内膜の構造や機能、着床の検査、治療を主に取り上げた。そこでも明らかになったように、失われた内膜機能の回復は困難である。不妊やARTに携わるものにとっては、子宮に対する手術が内膜機能温存に深くか

かわることを痛感される。

第2部では、婦人科疾患に対する手術を中心とした治療と子宮内膜機能温存をメインテーマに企画をまとめた。子宮内膜癌や子宮頸癌の治療はもちろん、子宮筋腫や子宮腺筋症の手術では機能温存に留意することは当然である。子宮ポリープなど比較的容易で初級者レベルの手術とみなされるものでも、子宮内膜の再生は困難を極め、機能温存が患者の妊孕性を左右することを忘れてはならない。子宮内容除去術でも然りである。子宮内の盲目的操作はリスクを伴い、パワーソースの使用は子宮内膜にダメージを与える可能性がある。釈迦に説法であるが、研修医からベテランの先生方まで、生殖年齢にあるすべての女性の手術にあたっては、今一度子宮内膜の機能回復は困難であることを念頭に、妊娠可能な状態を維持することに全力を注いでいただきたい。本特集はエキスパートの先生方に臨床医の必須知識をまとめていただいた。ぜひお手にとっていただき、明日からの診療にお役立ていただければ幸いである。

* Osamu Tsutsumi, Maki Kusumi 山王病院リプロダクション・婦人科内視鏡治療センター/国際医療福祉大学大学院生殖補助医療胚培養分野